

保幼小接続 福井モデル

学びをつなぐ 希望のバトン プロジェクト

— “学びに向かう力”をはぐくむ —

福井県幼児教育支援センター

プロジェクト名称の意味

学びをつなぐ“希望のバトン”プロジェクト

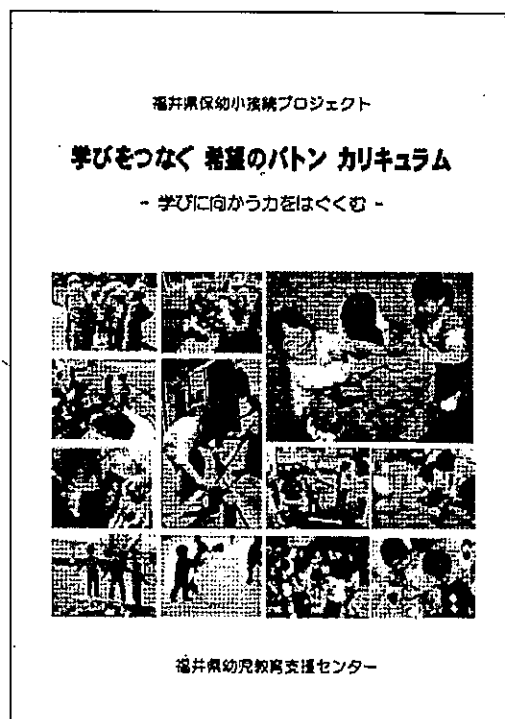
- 1 幼児教育から小学校教育へ子ども一人一人の学びの歩みをつなぐ
- 2 保育者・教師が、子どもたちの主体的な学びの伴走者として、学びのバトンをつないでいく
- 3 子どもたちが希望に向かい自ら学びに向かう姿を支える保育・教育を公私校種を超えて実現する

プロジェクトの趣旨

- 1 福井県独自の保幼小接続カリキュラムに基づき、幼児教育と学校教育をつなぐ仕組みを構築する
- 2 全県下での実践普及のため、市町幼児教育アドバイザー、園内リーダーの養成研修を行う
- 3 カリキュラムの策定・福井型研修の柱により、保育士・幼稚園教諭・保育教諭および小学校教諭が学び合う体制を整える

希望のバトン カリキュラム の策定

- 1 福井型18年教育のスタート期のねらいと道筋の明確化
- 2 幼児期と児童期の教育が一体的にかかわる仕組みの実現
- 3 生涯学ぶ基盤の育成



カリキュラムの特徴

- ① 子ども一人一人の“学びに向かう力”の育成に 重点
友達と共通の目的に向かって、子ども自身が主体的に
遊び・活動を発展させていく力

集中・挑戦・工夫する、意欲を持つ、協同する、自己調整する 等

- ② 幼児教育と小学校教育との接続の視点から
「5歳児が経験する内容」を明確化
- ③ 事例研究による実践のポイントを具体的に提示

5歳児が経験する重点内容

- 1 保育所、幼稚園、認定こども園、公私立 共通
 - 2 基本的な内容【言葉・数・自然・約束】
- ◎ 夢中になって遊ぶ中で気づきが得られるもの
 - ◎ 子ども自身が遊びを発展させる中で感じるもの
 - ◎ 文字・数・自然等の気づきを生み出すもの
 - ◎ 多様な学びを促すもの

カリキュラムをもとに実践



【5歳児】



【1年生】

保幼小接続 福井モデル

保育者が「子どもがこれからどのように育つのか」を見通し、
小学校教諭が「子どもがこれまでどのように育ってきたのか」を理解し、
お互いに「今、目の前の子どもたちとどうかかわればよいか」を学び合う

子どもの学びの連続性を保障

5歳児Ⅱ期 展開例「鬼遊びをしよう」

➤ 遊びの中に「学びの芽」があることを自覚することが大切である。

(言葉) 思い切り身体を動かすことが楽しいと感じて、気持ちを言葉にして友達と伝え合い共感する。

(規範意識) ルールを守らないと楽しくないことに気づき、声を出してタッチするなど、より楽しむためのルールを作る。

鬼遊びの例

(数) なかなか捕まえないときに、「逃げる場所の広さや鬼の数を換えよう」等考えを出して解決する。

(思いやり) 小さい子と一緒に遊ぶときに、どうすれば相手も自分も楽しめるか考えて、走る速さを調整する。

- 様々な活動をする（行事を増やす等）だけでは、子どもの主体的な成長を促すことにつながりにくいため、子どもの心の揺れ動きをとらえて支援することが必要。
- 子どもの気づきをつなぎ、発展させるために、保育士・幼稚園教諭が日々の保育で協働することが必要。

福井型研修システムの柱

- ① 市町幼児教育アドバイザーの育成
 - 全園的な立場で幼児教育を支援
 - ② 公私立・園種の枠を超えた園内リーダーの育成
 - 公立・私立・国立、保育所・幼稚園・認定こども園の枠を超え、園の横のつながりづくり
 - 研修内容の焦点化「遊びの中の学び」
 - ③ 保幼小合同による接続講座の実施
- ※ 平成26年度の受講者 3,000名

福井型研修システムの特徴

- ① 県幼児教育支援センターと大学との連携
 - チームで研修のサポート
 - 全ての市町との連携
 - 実践研究

“子どもの姿で学び合う”

- ② 県独自の認定制度の立ち上げ
- ③ 県教育研究所、嶺南教育事務所、特別支援センター等、関係機関との協働

